

FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 鳩貝 耕一

所属/職名： 情報教育研究センター 教授

参加セミナー名： 大阪市立大学 第 22 回教育改革シンポジウム「高等教育大衆化での研究大学の役割
－研究と教育を統合した高大接続の展開－」

セミナー参加日時/場所： 2014 年 12 月 8 日（月）15:30～17:30 大阪市立大学杉本キャンパス学術
情報総合センター

■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

講演は、東北大学で五つの教育系センター長を兼務されている羽田貴史先生によるものであった。羽田先生は国内外の大学教育の動向についての豊富な見識をお持ちの方であり、東北大学のような研究大学における初年次教育や全学共通教育の現状と課題を中心に報告された。

1. 日本の大学教育の課題は何か

定型的問題で測られる「できる力」の水準は高いが、非定型的問題で測られるような「わかる力」は国際平均レベルであり、問題に含まれる新たな情報を自分の知識と組み合わせて説明する能力が低いことを示している。OECD の「国際成人力調査 PIAAC」でも、読解力や数的思考力などは 1 位なのに、知的好奇心は調査参加 24 カ国中 23 位と揮わない。

2. 日本の大学教育論の課題は何か

このテーマでは、多文化共生社会における市民を育てることの重要性、そのためのキィ・コンピーテンシーの育成、ある文脈で学習したことを別の新しい文脈で活かす能力の育成とそのためにはどのような教育を行うべきかなどについて、様々な参考文献に書かれている要点をかいつまんで説明された。

3. 大学教育をどう構築すべきか

このテーマにおける解説が、今後の教育を考える上で一番参考になった。

学力の両輪として、上記の「できる学力」と「わかる学力」の相互作用が重要である。特に、「わかる学力」を高めるための学習方法として「共同的探求学習」を行っていく必要がある。

大学初年次教育が決定的に重要である。入試成績と卒業時の成績に相関はないが、一年次終了時の成績と卒業時の成績には強い相関がある。初等中等教育での学びから、社会人の学びに向けての「学びの転換」が必要であり、「建設的協同学習」を推進していく必要がある。

正課／非正課を超えた学習・学生支援の構築が必要であり、フィールズ賞受賞者の広中平祐先生が山口大学学長在職中の 2000 年に文部省に提出した、いわゆる広中レポートは当時としては革新的な内容であり、これが現在における学習支援の始まりであった（慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス SFC のような先行事例はあるが）。

東北大学では、2010 年度より学生のための学習支援スタッフ SLA (Student Learning Adviser) を設けている。主に学部 3 年生～院生の学生が、SLA として全学教育を受ける学部 1・2 年生の学習サポートを行っている。コンセプトは学生同士の「学び合い」であり、細々ながら SLA プラザを設置し活動している。この英語名を聞いて気づかされたのは、これまでは「学生を育成する」という意識が強かったけれどもそれは間違いで、学生どうしの学び合いにより学生それぞれが「自主的に学習を進める」、よう援助することが教育学習支援センターの目的であるということであった。